

国立国語研究所学術情報リポジトリ

方言東西対立分布成立パターンについての覚え書き

著者	小林 隆
雑誌名	研究報告集
巻	12
ページ	165-189
発行年	1991-03
シリーズ	国立国語研究所報告 ； 103
URL	http://doi.org/10.15084/00001339

方言東西対立分布成立パターン についての覚え書き

小林 隆

KOBAYASHI Takashi : On the Formation Pattern of the Opposition
between Eastern and Western Dialects

要旨：現代方言における東西対立分布が、どのように成立したかを、『日本言語地図』と文献資料により考察した。その結果、東西対立の成立パターンには、東西対立をなす語形の、①放射の中心地、②放射の順序、③伝播の範囲の三つの観点から見て、四つの異なるタイプが想定されることが明らかになった。また、安部清哉氏の方言分布成立における「四つの層」の仮説が、東西対立の成立過程を説明するのに妥当かどうかを検討した。

キーワード：方言分布、東西対立、伝播、方言史、語史、『日本言語地図』、文献初出例

Abstract : I examine how the opposition of east and west in the distribution of modern dialects in Japan originated, using the Linguistic Atlas of Japan and some historical materials. I first consider the opposition patterns from three angles : (1) distributions from a center, (2) sequence of distributions, (3) scope of distributions ; it appears that four different types can be distinguished. Next, considering the hypothesis put forward by Abe (Seiya) on the existence of four layers in the formation of dialects, I examine whether this explains the east/west opposition.

Key words : distribution of dialects, opposition of east and west, spread of dialects, history of dialects, history of words, Linguistic Atlas of Japan, first example in historical materials

1. はじめに

現代方言に見る東西対立分布の成立過程について考えるために、先に筆者は一つの基礎的な作業を行った。すなわち、『日本言語地図』からこの分布型を示す30項目を取り出し、それらの項目で東西に対立する語形が、文献上いつの時代のどの地域の文献に初めて現れてくるかを調査し報告した。

小林隆「方言における東西対立分布の史的傾向」(『奥村三雄教授退官記念国語学論叢』1989・6, 桜楓社, 以下「前稿」と称す。)

しかし、得られた結果は、基本的には方言分布と文献とを対比しての言わば表面的な事実にすぎなかった。そこで、本稿においては前稿の結果を基に、成立過程の考察に駒を進めようと思う。特に、ここでのねらいは、東西対立をなす語形の、①放射の中心地、②放射の順序、③伝播の範囲の三つの観点から、東西対立の成立過程として想定可能なパターンを描き出すことにあ
る。ただし、抽出した成立パターンはきわめて図式的・概略的なものとどまり、また、各パターンへ30項目を具体的にどうあてはめるかという点も、後日に待つべきところが大きい。さらに、方言分布の形成様式としては、上記①②③の他に、伝播の経路、時期、速度、強度などが、検討すべき観点として残されている。その点で本稿は、東西対立分布の成立過程を扱いながらも、その見通しの一部を述べた段階にとどまる。文字通りの覚え書きである。

ところで、安部清哉氏が提出している方言分布成立における「四つの層」の仮説は、当然この東西対立分布の成立をも説明すべきもののはずである。この仮説が妥当性をもつものか否か、本稿の考察を通してあわせて考えてみたい。

2. 東西対立語形の文献上の位置

考察の資料として、前稿で調査した30項目における、東西語形の文献初出時期の比較結果を掲げる。ここでは、まず、語形の放射の中心地を考える際の手がかりとなる、初出文献が反映する言語の地域性を柱に分類する。ただし、西の語形の初出はすべて京畿系文献であるので、東の語形を載せる文献

の地域性を軸に第一の分類を行う。続いて、その内部を両語形の放射の時期・順序関係を示唆する初出時期の新古関係（古＞新）で細分するようにまとめて示す。＞＜＝記号の左側が西の語形、右側が東の語形であり、（ ）内は『日本言語地図』の項目名を表す。なお、一つの項目で複数の語形が存在する場合は、東西とも最も古い初出時期を有する語形同士を比較したが、必要に応じて他の語形についても付記する。初出文献名など詳しいことは、前稿を参照してほしい。

I. 東の語形の初出が東国・江戸系文献であるもの

ア. 西の語形＞東の語形

①上代＞中世後期

オウ＞ウブウ（おんぶする）：東の語形オブウは近世後期・江戸系文献初出、同じくオブは近世前期・東国系文献初出。

カル＞カリル（借りる）

②上代＞近世前期

ケブリ＞ケム・ケブ（煙）：西の語形ケムリは中古・京畿系文献初出。

③上代＞近世後期

カライ＞ショッパイ（塩辛い）

ステル＞ウッチャル（捨てる）

④中古＞近世前期

オソロシイ・オゾイ＞オッカナイ（恐ろしい）：西の語形コワイは中世前期・京畿系文献初出。

⑤中古＞近世後期

オウ＞ショウ（しょう）：西の語形セオウは中世前期・京畿系文献初出。

スイ＞スッパイ（酸っぱい）

⑥中古＞近代

バラ・ハリ＞トゲ（とげ植物）

⑦中世前期＞近世後期

シアサッテ＞ヤノアサッテ（あさっての次の日）

⑧中世後期＞近世前期

ツイリ・ツユ＞ニュウバイ（梅雨）

クイ＞トゲ（とげ裂片）

⑨近世前期＞近世後期

カンコクサイ＞ヒナクサイ・キナクサイ（きなくさい）

イ．西の語形＝東の語形

⑩中世後期＝中世後期

ウロコ＝コケラ（鱗）

⑪近世前期＝近世前期

ツルノマゴ・ヒヒマゴ・ヤシマゴ＝ヤシヤゴ（やしやご）

Ⅱ．東の語形の初出が京畿系文献であるもの

ア．西の語形＞東の語形

⑫上代＞中世後期

オル＞イル（居る）

注．前稿ではイルの初出文献を『万葉集』としたが、本稿では金水敏「人を主語とする存在表現—天草版平家物語を中心に—」（『国語と国文学』1982・12）, 「「いる」「おる」「ある」—存在表現の歴史と方言」『ユリイカ』16—12, 1984・11）に従い、中世後期・京畿系抄物とし、ここに分類しなおす。

⑬中古＞中世前期

ヌカ＞コヌカ（糠）

⑭中古＞中世後期

ナスビ＞ナス（茄子）

タケ＞キノコ（きのこ）

⑮中世後期＞近世前期

ベニサシユビ>クスリユビ（薬指）

注．前稿ではクスリユビの初出文献を『書言字考節用集』としたが、本稿では小林隆「位相論的語史の試みークスシユビとクスリユビー」（『国語学』154, 1988・9）に従い、近世極初期・京畿系文献『内閣文庫蔵就弓馬之儀大概聞書』とし、ここに分類しなおす。

イ．西の語形＝東の語形

⑩中古＝中古

アゼ＝クロ（あぜ）

⑪中世後期＝中世後期

ヒザクム＝アグラカク（あぐらをかく）

カタゲル・ニナウ＝カズク（担ぐ材木）：東の語形カツグは近世前期・東国系文献初出。

オドシ＝カガシ（かかし）

ウ．西の語形<東の語形

⑫中世前期<上代

ヤイト<キュウ（灸）

⑬中世後期<中世前期

ヒマゴ<ヒコ（ひまご）

Ⅲ．東の語形の初出文献の地域性が不明なもの

ア．西の語形<東の語形

⑭文献なし<中世後期

ウメボンなど<クルブシ（踝）

Ⅳ．東の語形を載せる文献がないもの

⑮上代>文献なし

ナヌカ>ナノカ（七日）

⑯中世後期>文献なし

コットイ>オトコウシ・オトコベコ（牡牛）

㊸文献なし＝文献なし

ゴアサッテ＝シアサッテなど（あさっての次の次の日）

3. 東西対立分布の成立パターン

前節でまとめたケースごとに検討したい。Ⅰア，Ⅱウ，Ⅱアの順に取り上げ，他はそれらとの関連で見えていく。

(1) Ⅰア. のケース

東の語形の初出が東国・江戸系文献であり，かつ，東の語形の出現が西の語形に遅れるこのケースについては，文献の結果のみに従えば，一応次のような対立の成立過程を想定できよう。すなわち，まず，西の語形（現在西日本に分布するという意味）の伝播が起こり，その後，東の語形（現在東日本に分布するという意味）が東日本に広まったと考えるのである。その際，語形の放射の中心地は，初出文献の言語の地域性から推して，西の語形は奈良・京都・大阪などの京畿であり，一方，東の語形は鎌倉や江戸などの関東であったと思われる。

ところで，問題となることの一つは，東の語形が伝播する以前に，西の語形がどの程度の範囲を自らの領域に収めていたかという点である。もし，東の語形の発生が西の語形の発生に対して相当に遅れるのであれば，西の語形は一旦は西日本のみならず，全国的に広まった時期があったのではないかと考えられる。そして，後に，新たに生じた東の語形が東日本内で西の語形を駆逐した結果，現在の東西対立が成立したと推定されるのである。今，理解の一助とすべく，以上のような成立過程を図式化すれば，次のように表現することが可能であろう（〔 〕が全国の範囲。| は東西対立の存在を示し，その左側が西日本，右側が東日本を示す。Wは京畿から放射された語形，Eは関東から放射された語形である。）

〔 W 〕 → 〔 W | E 〕 ……………(a)

これに対して，東西語形の発生時期が近接している場合には，上とは

やや異なった過程を描いてみる必要がある。すなわち、西の語形の伝播開始後、まもなく東の語形の放射も始まったとするならば、西の語形は東日本に進出しかけたものの、すぐに東の語形の勢力に東進をはばまれ、あるいは押し戻されることになり、したがって、全国に広まることはできなかったと思われるのである。その場合の東西対立は、対峙する双方の語形にとってはほぼ現在の位置に最初から存在していたわけであり、これを図式化すれば、先の(a)の図式から最初の[W]の段階を抜き、単純に次のように示すことが可能であろう。

[W | E](b)

もちろん、この図式は、Iイ.のケース、つまり、東の語形の初出が東国・江戸系文献であり、かつ、東西の語形の初出時期が等しいケースにこそあてはめるべきものであるが、双方の語形の初出時期の近接するケースも、この図式に近い形で考えることが許されよう。

前節に掲げた具体例で言えば、①「おんぶする」「借りる」から⑦「あさっての次の日」あたりまでが、東西語形の文献出現時期に開きが大きく、上の(a)の成立パターンである可能性が一応高いと言える。一方、⑧「梅雨」「とげ(裂片)」と⑨「きなくさい」は、東西語形の初出時期が近接し、(b)の成立パターンである可能性が強い。

なお、上に描いた(a)と(b)のパターンは、西の語形が一旦全国に広まってから後退したか、それとも初めから東西対立の位置に停止したかという点で両極端な場合を示したものである。実際には、両者の中間的なケース、例えば西の語形が関東までは東進したが、そこから現在の対立位置に押し戻された場合などがありうるであろう。そのような細かな分類は、今は置いておく。また、ここで直接問題にしているのは、現在東西に分布する語形の対立の成立であるから、東西語形とも文献への出現の遅いものは、それ以前に別な語形の分布が存在したことが考えられる。例えば「梅雨」の場合には、ツユとニューバイの対立成立以前に、現在琉球と東北にみられるナガアメの系統が、広く日本をおおっていたと推

定される。その点をも視野に入れるならば、このようなパターンは、

[W₁] → [W₂ | E] ……………(b')

のように図式化するのがよからう。今はこのようなパターンも、(b)に含めて考えることにする。

さて、ここでさらに考えておかなければならないことは、一見(a)のパタンのように思われても、別な角度から見ると、(b)のパタンに転ずるものが現れるのではないかという点である。上の考察では、東西語形の発生と伝播に関して、文献への初出時期のみを手がかりとしていた。しかし、特に東の語形については、文献の量の時代的な偏りに発する次のような問題を考慮しておかなければいけない。すなわち、東国文献の分量がまとまって得られるのが中世後期以降であることを考えた場合、東の語形が西の語形より文献への出現が遅れるのは、その語形の発生自体が遅かったからではなく、それを載せる資料に恵まれなかったからではないかという可能性があることに気がつく。したがって、文献には現れないものの、東の語形は、西の語形に劣らず古い時代に生まれ、東日本での地歩を固めつつあったことも考えられる。もっとも、近世後期ごろになってようやく東国・江戸系文献に載るような語形は、はたしてそれ以前に文献に現れる機会が全くなかったか疑問であり、したがって、その成立も、そのまま文献上の初出時期に従って近世後期と考えてよいかもしれない。しかしすでに中世ごろから東国文献に認められる語形については、それ以前の東国文献のきわめて限られる時代にも、実は東日本に存在していたという可能性は十分ありえよう。もしその可能性の通りならば、西の語形は、東の語形に東進を阻止され、東日本に伝播することはできなかったことになる。つまり(b)のパタンと考えられるのである。具体例で言えば、東の語形の初出が中世後期である①「おんぶする」「借りる」、また近世前期に初出をもつ②「煙」、④「恐ろしい」あたりが(b)のパタンに転じうる候補であろう。

ただし、それらの候補のうち、「おんぶする」「借りる」「煙」の3つ

は、東の語形の発生基盤に西の語形の存在を想定する必要がある、したがって(a)のパタンにとどまる可能性が強いと思われる。すなわち、カリル（借りる）はカルを、ケム・ケブ（煙）はケムリ・ケブリを、それぞれ母体として想定しなければならず、それらの母体語形が東日本に存在したことが、カリルやケム・ケブ発生の前提と考えられるのである。またウブウ・オブウ（おんぶする）の発生にも、オブ（帯ぶ）の他オウが何らかの形で関与していたのではないかとと思われる。一方、「恐ろしい」のオッカナイについては不明の部分が大きいが、柳田国男が言うように、もし「オーコワ（おお、こわい）」という感嘆表現からの成立だとすれば（柳田国男『毎日の言葉』）、ここでもオッカナイ以前にコワイという語形の、西から東への伝播を想定する必要が出てくる。

このように、東日本（特にその中心としての関東）には京畿から放射された語形を受容するとともに、それを基盤として新たな語形を再生する力が認められる。言わば京畿語形に対する「焼き直し」作用である。上記の事例の他にも、⑤のショウ（しょう）は西のセオウの再生形と認められるし、③のショッパイ（塩辛い）も、かつて京畿から全国各地に伝播したと推定されるシオハユシなどからの変化形と考えられる。また、③のウッチャル（捨てる）の母体となったのは、京畿語形のウチャルだが、ウチャルはもともと「放り出す」というような意味だから、「捨てる」のウッチャルが再生されるにあたっては、形態変化のみでなく意味変化も起こっていたことになる。さらに、③のカライ（塩辛い）、⑦のシアサッテ（あさっての次の日）という西の語形は、それぞれ「辛い」「あさっての次の次の日」の意味でなら東日本でも使用するわけだから、これらの語形は、もともと「塩辛い」「あさっての次の日」の意味を（も）担って東日本に伝わった後、東日本で意味を縮小されたり、すりかえられたりした可能性が考えられる。このような意味変化もまた、「焼き直し」作用の一種とみなしてよかろう。東日本の方言はかつての京畿方言の子孫であると説いたのは金田一春彦氏であったが（「東国方

言の歴史を考える」『国語学』69, 1967・6), 上で見た「焼き直し」作用の存在からは、確かに東日本方言に京畿方言の子孫と呼ぶべき面があると言える。

話を、(a)のパタンか(b)のパタンかの判定に戻すと、それには当然のことながら、東の領域内に西の語形の残存分布が見られるかどうかという方言地理学的な証拠も重要なはずである。ただし、実際問題として、Ⅰア．に分類した項目ではほとんどの場合、西の語形の東日本内での存在がないか、あっても微少で、今のところこの手がかりを生かしきれないでいる。

(2) Ⅱウ．のケース

次に、東の語形の初出が京畿系文献であり、かつ、東の語形が西の語形より先に文献に出現するこのケースは、すでに見たⅠア．のケースに比して具体例が少なく、⑮の「灸」と⑯の「ひまご」の二つのみであった。その東西対立は次のように成立したと考えるのがよいと思われる。すなわち、京畿から放射された語形が一旦全国に向かって広まった後、ふたたび京畿から別な新しい語形が放射され、今度は西日本を中心に伝播が行われた結果、東日本にはもとの古い語形がそのまま残った、と推定するのである。その過程は、次のように図式化されよう。

$$[W_1] \rightarrow [W_2 | W_1] \dots\dots\dots(c)$$

なお、東の語形の西日本における分布を見ると、キュウ（灸）が西日本に多量に混在するのに対し、ヒコ（ひまご）は全くといってよいほど分布をもたないが、これはなぜであろうか。一つには、それらの語形と対立する語形との間の文体差が関与していたことが考えられる。すなわち、ヒコとヒマゴは文体的価値がほぼ等価であるのに対し、キュウとヤイトは、前者が漢語であるために後者に比べてやや高めの評価が付与されており、その結果文体上の微妙な使い分けが生じ、それが両者の共存を許したと思われるのである。次に、対立する語形との形態上の類似にも注意したい。つまり、キュウとヤイトのような全く別形態の組み合わせ

せよりも、ヒコとヒマゴのような類似性の強い語形同士の方が、新形が古形にとって代わるのに使用者の抵抗が少なく、交替のスピードが早かったのではなかろうか。さらに、キュウが現在の共通語形であることからすれば、西のキュウの中には近代以降の共通語化によるものが混じっている可能性も検討してみなければならない。共通語形の伝播そのものでなくとも、西日本で衰退しかかっていた方言形キュウを共通語に昇格したキュウが保持し復興したというような場合も含めてである。

今、「灸」と「ひまご」を対比して残存分布の強さの違いが何に起因しているかを推測してみたわけだが、この問題はひとりこの「灸」や「ひまご」という項目にとどまるのではなく、実は他のすべての項目で考えなければならない課題である。また、東西対立以外の分布類型も含め一般的に検討するのがよいであろう。方言形成における以上のような要因論については、またあらためて考察したいと考える。

(3) II ア. のケース

次に、東の語形の初出が京畿系文献であり、かつ、東の語形が西の語形より遅く文献に現れるというこのケースは、その事実をそのまま東西対立の成立過程に反映させれば、以下のように推定しうる。すなわち、京畿から放射された語形が一旦全国に向かって広まった後、ふたたび京畿から別な新しい語形が放射され、今度は東日本を中心に伝播が行われた結果、西日本にはもとの古い語形がそのまま残った、と考えるのである。これは、京畿から二番目に放射された語形の伝播の方向がむしろ東であるという点において、II ウ. のケースと対照的なものであり、その点は次の図式と先の(c)の図式との比較によっても了解されよう。

$$[W_1] \rightarrow [W_1 | W_2] \dots\dots\dots (d)$$

しかし、このようなパターンは直感的には疑問である。つまり、京畿は西日本に含まれその中心地であることからすれば、そこからの伝播が(c)のパタンのように主に西日本に偏って行われるということはあるにしても、西日本には分布を形成せず、東日本にのみ進出するという(d)の

ような過程がはたして容易に想定できるかどうかということである。この点は、東西対立分布の成立を考える上で、かなり大きな位置を占める問題であり、ここでは十分な検討を加えることはできないが、とりあえず次のような三つの可能性を提出しておきたい。

まず第一に、京畿から二番目に放射されたとみなした語形は、実は東国出自の語形であり、東日本に勢力をもっていたその語形を、京畿系文献が何らかの理由で採用した、という考え方がとりえよう。これならば、問題の語形が東日本中心の分布を示す理由も説明がつく。この場合の東西対立の成立過程は、結局(a)か(b)であることになる。もちろん、この解釈をとるためには、京畿系文献がなぜ東の語形を採用したのか、その説明が重要なかぎになる。

一般的には、中世以降の関東や江戸の文化的勢力の増大にともなって、そのことばが京畿語に混入していった可能性は考えられなくはない。南北朝の時代に至ると、京の公家に関東の武士ことばをまねる風が生じてきたようであり、それを端的に物語った『太平記』巻21の「公家ノ人々、イツシカ云モ習ハヌ坂東声ヲツカイ」（天下時勢粧事）というくだりはあまりにも有名であろう。ただし、これが誇張された表現でなかったと仮定しても、そのように関東風を取り入れたのが貴族層に限ったことなのか、それとも庶民層も含めた社会全体の傾向であったのかは一つの検討課題として残る。また、採用された東の語形が、日常語のレベルで安定して用いられ続けたのか、それとも一時的な現象にすぎなかったのかも明らかにすべき点である。さらに、それらの語の採用の契機については、武士の台頭に伴って東国語自体の評価が高まったとか、あるいは文献の作成者として東国語地域出身者の選ばれる確率が増えたなどという社会的要因の他、文芸上の一技巧として取り入れられたとか、あるいは語彙体系上の合理的な理由に基づいて採用されたなど、言語的要因についても吟味しなければならないであろう。以上のような問題点の検討の上で、この第一の可能性は説得力をもってくるものと思われる。

第二の可能性は、京畿から二番目に放射されたと考えた語形が、実際は一番目と認めた語形に先立って全国に伝播していたのであり、東日本ではそれが残ったが、西日本では後から伝播した語形（当初一番目と考えたもの）に分布を奪われることにより東西対立が成立した、という解釈である。これは、結局(c)のパターンと同じ過程を想定することになる。この場合の問題は、なぜ放射され語形の順序が、文献への出現順序と食い違うのかということである。

一般論としては、文献上に現れた用例というものは実際に存在した言語史のいわば氷山の一角であり、たまたま文献への出現が遅れたからといって、それ以前にその語形が存在していなかった証拠にはならないという見方がある。特に、文献になじまない意味分野のことばや使用頻度の低いことばの場合には、文献に登場する機会が少ないために初出が遅れるということが考えられる。しかしまた一方で、やはり文献への出現の遅れに積極的な意味を見出そうとするならば、従来見過ごされがちであった言語の位相差という点に注目するのも一つの道であると思われる。すなわち、京畿から放射された一番目の語形（つまり現在の東の語形）の文献への出現が遅かったのは、それが庶民階層の口頭語としての性格が強かったために文献には記されにくかったからであり、低い階層・文体のことばを記録する文献の出現を待って、ようやく文字に浮上したと考えるのである。この解釈は、東の語形に庶民語的・口頭語的な色合いの感じられること、また、東の語形が京畿で使用されたと思われる時期に、それを文献に現れにくくさせるような意味的に対応する有力な書記言語が存在したこと、さらに分布上西日本に東の語形の残存が認められること、などの条件がそろえば可能性が高いのではないかと思われる。

第三の考え方は、最初に示した(a)のような過程が、実際に起こりえたと認めるものである。その際、伝播の経路まで問題にするならば、京畿語形が東日本に広まるにあたっては、京畿から地を這うように徐々に東

へ伝わっていた場合と、一旦関東に飛び火的に伝播しそこから周囲に再放射された場合の、少なくとも二通りの経路が考えられよう。そのいずれにせよ、この第三の考え方をとるためには、京畿で生じた二番目の語形の伝播を西日本が拒んだ一方で、東日本が受容するに至った理由が説明される必要がある。それにはどのような理由が考えられるであろうか。

一つには、東日本が語彙体系上の不都合などにより、当該の項目で新しい語形を積極的に取り入れる必要があったという可能性が挙げられよう。つまり、言語機能面の理由である。また、心理的な理由として、言語の改新について、例えば、西日本が保守的であるのに対して東日本は進取の気象に富むために、新しい語形が東へ強く流れる場合があったというようなことは考えられないであろうか。あるいは、語構成や命名法などの面で、西の人々が積極的な好意を示さない、ある独特の色合いをもった語形を、東の人々が好んで受容したというようなことが言えればおもしろい。しかし、これらの考えは今のところ全く想像の域を出ないものである。

さて、以上の三つの解釈を、具体例にどうあてはめるべきかを次に考えてみたいが、現段階では一つの可能性に限定することの困難な場合が多い。

まず、⑫のイル（居る）については、金水敏「「いる」「おる」「ある」—存在表現の歴史と方言」（『ユリイカ』16-12, 1984・11）が触れている。それによれば、中世後期京畿語のイルが、飛び火的に伝播し広まったのが東日本のイルの分布ということになる。すなわち、第三の解釈をとるわけである。ただし、京畿語のイルを西日本が受容せず東日本のみが取り入れた理由については、金水論文は教えていない。柳田征司「近代語の進行態・既然態表現」（『近代語研究』8, 1990・9）によれば、中世後期には京畿同様東日本でもオルが「卑下・軽卑表現」となりつつあったことが推定されるから、その手当てのためにイルが積極的に東日本へ流出した可能性が考えられる。それにしても、以上の見通しは、中

央文献上の事実を主体に方言分布を説明しようとするものであり、一方で、方言分布自体の解釈がなされるべきだが、イルとオルとは明瞭な東西対立をなして双方を犯すことが少ないので、分布のみから東西の関係を論ずることは残念ながら難しい。なお、ここで問題にしている「居る」とは、『日本言語地図』が対象とする「居る」であり、すなわち、「あそこに人が「イル」と言うか、「オル」と言うか、……」という質問文が示すような、いわゆる人物の存在表現に的をしぼったものである。しかし、イル・オルの意味は、～テイル・～テオルなども含めて、金水・柳田論文が扱うようにきわめて幅の広い体系的なものであるから、方言分布の側でもその全体を視野に入れた考察が今後必要となる。それによつては、第一・第二の解釈も浮上してくる可能性があるかもしれない。

次に、⑭のナス（茄子）については、この語形の前段階としてナスビという形を位置付けるべきであるから、第二の解釈は避け、第一か第三の解釈をとるのが適当と思われる。そして、ナスの文献初出が『御湯殿上日記』『大上臈御名事』などであることから推して、この語形が内裏の女房詞として発生したと考えれば、京畿を放射の中心とする第三の解釈の可能性が一応高くなるであろう。ただし、なぜ、京畿のナスが東へのみ広まったのか納得のいく説明が思いつかない。また、西日本に混じるナスの分布を見ると、それがナスビより新しいとは必ずしも断定できないという問題も残る。

次に、⑬のコヌカ（糠）もヌカという形態を前提としてはじめて成り立つ語形であるが、こちらは「粃殻」のヌカに対するコヌカであり、ナスの場合とは事情が別である。西日本でのコヌカの分布は、ヌカに対して残存的に見え、そのことは、近世の分布との対比によつてもある程度納得されるから（小林隆「農書から見た近世の方言分布—＜糠＞と＜粃殻＞を例に一」『国語学』140, 1985・3）、第一・第三の解釈よりは、第二の解釈によるべきと思われる。ただし、「粃殻」のヌカとの関係など語彙体系上の理由がからんで、各地で自律的にコヌカという形が発生した

可能性も残るので、全国のコヌカの分布を一概に京畿語のコヌカと結びつけるには慎重でなければならない。

続いて、⑭のキノコ（きのこ）の場合も、西での分布がやや残存的に思えるし、この語形の語源の素朴なことなども考慮すれば、やはり第二の解釈がありえよう。しかし、「語誌—きのこ（菌・茸）」（『語座日本語の語彙 9』1983・1、明治書院）でも述べたように、タケの分布が、竹のタケとのアクセント上の区別を保った京阪式アクセントの地域にほぼ限られていることに注目すると、東日本など二つのタケのアクセント上の区別を失った地域で、同音衝突を回避するために積極的に京畿で生じたキノコを採用した（第三の解釈）という可能性が高いのではないかと考えられる。あるいは、二つの植物の名称を、そのようなアクセントに頼って区別するという不安定な状態は、どのみち京阪アクセントの地域においても嫌われ、その結果、東国語のキノコを京畿が受け入れ使用を開始した（第一の解釈）という考えも検討の余地はあろう。

最後に、⑮のクスリュビ（葉指）については、以前やや詳しく扱ったことがあるが（「位相論的語史の試み—クスシュビとクスリュビー」『国語学』154、1988・9）、それによれば、第一の解釈の可能性にも配慮が要るものの、西のベニサシュビの中にクスリュビの残存分布が認められること、クスリュビが使われたと思われる中世に、それを文献に現れにくくさせるクスシュビという対立する書記言語が存在したことなどの理由により、第二の解釈をとるのが今のところ最も妥当と考えられる。

ところで、①の「借りる」については、東の語形のカルルの初出文献が『人天眼目抄』という東国文献であるために、Ⅰア．に分類したが、前稿で述べたようにカルルは、ほぼ同時代の『静嘉堂文庫蔵運歩色葉集』にも姿を現しているから、このⅡア．のケースとして検討すべき性格ももちあわせている。そして、この点については、迫野虔徳氏が詳述された通り（『東国文献と言語指標』『北九州大学文学部紀要』7、1971・12）、カルルは、ハ行四段活用動詞の連用形促音便地帯すなわち東国

(および山陰)において、そもそも「買って」との同音衝突を避けることを契機として成立した語形であり、それが京畿語の中にも混入してることがあったとする考え方が説得力をもつ。ここでの解釈で言えば、第一の可能性を支持し、その東西対立の成立を(a)のパタンと考えるわけである。もちろん、カリルの京畿語へ混入の理由についてはあらためて説明されなければならない。また、先のキノコ(きのこ)の場合のように、京畿で発生したカリルを東日本が積極的に採用したという案も、全く否定し去るわけにはいかないであろう。

また、⑧の「とげ(裂片)」もⅠア.としたものであるが、やはり前稿で述べた通り、東の語形のトゲは、初出の『梅津政景日記』とほぼ同じ近世前期の『好色五人女』にも見えているのが気になる。ただし、それが八百屋お七の話で使われているものであることからすれば、舞台の江戸らしさを表現するために、西鶴が東国語から作品に採用した語形であったという文芸技巧上の解釈が成り立ちうる。しかしまた、このトゲが、一般には方言色とは関係の薄いいわゆる地の文にあたる位置に現れている点は疑問であり、十分な説明が要求されよう。

さらに、②の「煙」についても『名語記』のケム・ケブを、現代語で「アー、ケム(ああ、けむたい)」というのと同じ、感嘆を表す形容詞語幹の独立用法とみなすべき可能性があると考え、前稿では確例から除いたのであるが、これがもし名詞と認定されるならば、やはり、Ⅱア.のケースとすべき可能性が残されている。以上の、「借りる」「とげ(裂片)」「煙」については、先の「居る」「糠」「茄子」「きのこ」「薬指」および後に取り上げる「鱗」「担ぐ(材木)」などの類例とともに、(d)のパタンの可能性も含めて今後総合的に考えてみたいと思う。

(4) その他のケース

ここまで、Ⅰア、Ⅱア・ウのケースについて、その東西対立の成立過程を考え、(a)から(d)までのパタンがありうることを述べてきた。残された他のケースも、ほぼこの四つのパタンにおさめて説明することが可能

であると思われる。

まず、Ⅰイ。すなわち、東の語形の初出が東国・江戸系文献で、かつ、西の語形と東の語形が同じ時代の文献から現れるケースについては、(b)のパタンをあてはめるのが自然であろう。⑩⑪の具体例で言えば、京畿で発生したウロコ（鱗）およびツルノマゴ・ヒヒマゴなど（やしゃご）の東進と、東国で発生したコケラ（鱗）およびヤシャゴ（やしゃご）の西進とが、東西対立の境界付近で対峙したと考えるのである。ただしコケラについては、前稿で述べた通り、初出は東国系文献であっても、同時代の京畿系文献にもすでに用例の認められるものであるから、その用例の解釈によっては(c)(d)のパタンである可能性も現れよう。またヤシャゴの場合には、厳密には(b')のパタンと推定すべきであり、ツルノマゴ・ヒヒマゴ対ヤシャゴの対立以前に、文献上、中古から見られるヤシワゴが全国的に広まった時期を想定する必要がある。東のヤシャゴはそのヤシワゴから生まれて東日本に広まったと認められるもので、その関係は、「塩辛い」のシオハユシとショッパイとの関係などと似ている。あるいは、ヤシャゴは主にヤシャマゴなどの形ではあるが、九州北部にも分布が存在するから、それが残存分布と判定されれば、(c)のパタンとして考える必要も出てくる。

次に、Ⅱイ。すなわち、東の語形の初出が京畿系文献で、かつ、西の語形と東の語形が同じ時代の文献から現れるケースは、まず(c)のパタンを想定するのが妥当であろう。つまり、東西の語形の文献への出現時期は同じであっても、実は東の語形が先に京畿で発生して全国に広まり、その後西の語形が京畿から西日本を中心に伝播したと推定するのである。⑩のクロ（あぜ）、⑪のアグラカク（あぐらをかく）、カガシ（かかし）の西日本での分布が残存分布と認定されれば、これらの項目が(c)のパタンに属する可能性が強いと思われる。一方、⑫のカズク・カツグ（担ぐ）は、それらの用例を載せる文献に東国系のものが多いことなどから、東日本において生じたとする考えが示されている（江口泰生「「せお

う」「かつぐ」等の表現をめぐる』『国語学会昭和63年春季大会要旨』1988・5)。それによれば、「担ぐ」の東西対立は(a)ないし(b)のパターンとして解釈されることになる。ただし、京畿系文献に現れたカズク、および西日本におけるカツグの強力な混在分布をどう受けとめるべきか、残された問題がないわけではなく、(c)(d)のパターンの可能性についてもなお検討の余地がある。

Ⅲ. としての㊶「蹠」およびⅣ. の㊶「七日」、㊶「牡牛」、㊶「あさっての次の次の日」についても、やはり(a)から(d)までのどれかのパターンに属すると思われるが、西あるいは東、または両方の語形が文献に見当たらず、その分推定が困難である。今後、文献資料の収集、分布図の解釈を深めていきたい。なお、「蹠」については、「文献と方言分布からみたくくるぶし(蹠)>の語史」(『国語学研究』22, 1982・12)を記したときに(d)のパターンと考えていたが、東西対立という全国分布成立の観点からは十分注目しておらず、さらに吟味の必要を感じている。

4. 「全国方言分布の成立過程における四つの層」について

日本語の方言分布の成立過程を統一的に説明しようとした試みに安部清哉氏の仮説がある。安部氏は、全国の方言分布について、その成立過程には放射の中心地と伝播の及ぶ範囲を異にする四つの層が存在し、それらが順次積み重なって現在見る方言分布を形成したとする考え方を示した。その四つの層とは、次に引用する説明の通りである。

初め全国規模で伝播が及んでいた段階（古代全国層）から次にその伝播圏が西日本のみに限定される段階（西日本層）がやってくる。いわば「伝播圏の縮小現象」が見られるのである。その後、近世になって勢力を得た江戸を中心にして、主に東日本を伝播圏とする層（東日本層）が西日本層に平行して発達するようになり、近代に入ってから主に東日本層の語を中心とした共通語の普及による、全国規模で伝播する第四の層（近代全国層）が形成されている。（安部「<庭>の変遷における方言分

布の四つの層」『文化』51-3・4, 1988・3, 180頁)

補足すれば、古代全国層および西日本層の伝播の中心は京畿であり、また古代全国層と西日本層の境界は文献時代以前ではないかと考えられている。

従来、個別的な解釈に傾くきらいのあった方言分布の解釈に共通性を見出し、その成立過程を統一的に説明しようと試みた点は新鮮で評価される。ただし、その内容については検討すべき問題点があるように思われる。ここでは、東西対立という一つの分布類型についてではあるが、前節の考察をもとに、この「四つの層」について考えてみたい。

さて、東西対立分布の成立過程には、前節で述べた通り(a)から(d)まで四つのパタンが推定される。このうち(a)(b)(c)の三つのパタンは、伝播の順序と中心地のみを問題にすれば、「四つの層」の考え方で説明可能なものである。しかし、伝播の時期に注目した場合、まず東日本層の発達が近世以降という点はいかがであらうか。しかも、「東日本層は近世半ば以降の江戸文化の台頭に伴うもの」(前掲論文201頁)というように、近世でも後半の時代が設定されているが、東日本層の発達の時期をそのように遅くに限定してしまうことには、次のような点で疑問が生ずる。すなわち、現在東日本に分布する語形には、ウブウ(おんぶする)、カリル(借りる)、オッカナイ(恐ろしい)などのように中世後期から近世初期の東国文献に現れ、その発生地域が東日本と考えられている語形が存在するのであり、したがって、中世後期にはすでに東日本層の生成がかなりの程度推測されるのである。また、京畿からの伝播が西日本にのみ限定されるという「伝播圏の縮小現象」について、それがなぜ生じたかを考えてみると、対立することばの壁の存在を想定することなくして、京畿からの放射がいわば、自律的に東への伝播を制御したということとは考え難い。つまり、東日本における方言層の発達が、西からの言語の伝播をさえぎったことが、結果として西日本語形の「伝播圏の縮小現象」となって現れたと解釈するのが妥当と思われるのである。そして、そのような「縮小現象」が安部氏の言う通り、文献時代以前か否かというような古い時代に始まっていたのだとすれば、西日本層と対立する東日本層の生成も、同

じように古くから行われていたと考えられるのではなからうか。

ただし、時代をさかのぼるほど、京畿と匹敵するような強力な伝播の拠点は、東日本に見出しにくくなるのは確かである。それでも、関東のあたりを中心に、東日本一帯の言語を等質化に導く作用が古くから働いていたことは考えられよう。そうした作用は、近世後期以降の江戸語の影響力とは比較にならないほど微弱なものであったかもしれないが、徐々に東日本層を醸成していくだけの力は備えていたのではないかと思われる。そして、最初そのような作用は、キュウ（灸）やヒコ（ひまご）の場合がそうであるように、京畿から伝播したそのままの形の語形に東のことばとしての色付けを与えると、いう消極的な方法で、西からの新たな伝播に抵抗することから始まり、次第に前述のような京畿語形の「焼き直し」や、それとは別の新しい語形を創造して広めるといった積極的な働きを得ることによって、西からの伝播を遮断するに至ったのではないかと思われる。近世後期以降の江戸からの伝播は、上のような一連の過程の最後の段階に位置付けられるべきものではなからうか。

また一方で、京畿から東日本への伝播は、東日本層の生成が開始された以降も連続して行われたことが考えられる。今回取り上げた項目の中では、コヌカ（糠）、ナス（茄子）、キノコ（きのこ）、アグラカク（あぐらをかく）、カズク（担ぐ）、カガシ（かかし）、クルブシ（踝）、クスリユビ（薬指）や、ジョッパイの母体となったシオハユシ（塩辛い）、ショウの母体となったセオウ（しょう）などが、文献時代以降の京畿語の東への伝播によるものである可能性をもつ。また、東西対立分布を離れても、同じく『日本言語地図』の項目で言えば、キレイ（奇麗）、タマゲル（驚く）、アタマ（頭）、カオ（顔）、アゴ（顎）、サカナ（魚）、ゾウヤク・ダマ（牝馬）、トンボ（蜻蛉）、カマキリ・イボムシ（蟻螂）、テントウ（太陽）、ゴミ（塵芥）、アシタ（明日）他、文献時代に入ってから京畿語が東日本に伝わったと推定される例を多数見出すことができる。したがって、安部氏が古代全国層と西日本層との境界の時期を文献時代以前に置こうとしている点にも不自然さが感じられる。東日本層が、近世後期以降の江戸語の影響により一気に生成されたので

はないように、古代全国層から西日本層への移行、つまり安部氏の言う京畿語形の「伝播圏の縮小」も急激に起こったのではなく、徐々にその度合いを強めていったものと考えるのが適当であろう。

このように見てくると、四つの層のうち、最後の近代全国層を除くそれ以前の層は、特定の時代と対応する明瞭な区切りをもった三つの段階として把握されるものではないことがわかってくる。東西対立の成立過程について言えば、それは東日本の方言層の発達、京畿からの放射の東進をしないで強く阻むようになり、しまいには両者の勢力が釣り合うに至る連続的な過程としてとらえられるべきものと考えられる。そして、初めのうちは東日本層の勢いが弱かったために、総合的に見るとそこに進入してくる京畿系語形の数も多かったが、時代とともに徐々にその割合は減り、何らかの積極的な理由なくしては、京畿系語形が東日本層の西側の壁を容易に超え難い状態が生じていったものと推測される。京畿系語形および東国系語形の分布層形成力における、以上のような連続的なバランスの推移というとらえ方が、東西対立分布の成立過程についての根本的な見方なのではないかと筆者は想像する。

この他、問題となることとしては、次のようなことがらが挙げられる。

まず、前節で示した(d)のような東西対立成立パターン、つまり京畿で生じた語形が西日本には伝わらず主に東日本に伝播し分布を形成するということが、実際に起こりえたとするならば、それは「四つの層」の枠組に収めきれない現象ということになる。もとより、(d)のパターンについては、この点からも考察を深める必要を痛感する。

次に、安部氏が第四段階とし位置付けた、共通語の普及による「近代全国層」を、どの程度積極的に認めるかも検討を要する点である。これは、西日本内における東語形の分布を残存分布と認めるか、共通語化による新しい分布とみなすかという解釈にも関わり、東西対立分布の成立過程を考える上で重要な位置を占める問題と言える。

さらに、京畿からの伝播が、東からの抵抗も少なく容易に全国に及びえた時代、安部氏の言う「古代全国層」の存在は本稿においても一応それを認め

て話を進めてきたが、文献時代以前というような日本語自体の成立と関わる時代のこととなると、その放射の中心をどこに求めるかが問題となる。少なくとも、安部氏や本稿がとるような、京畿のみに中心を想定する考え方はもはや許されず、九州北部など京畿より西方の地域にも注目する必要が出てこよう。この問題は、さらに東西対立と基層言語との関係という難問にも発展していかざるをえないはずである。

5. むすび

東西対立分布の成立パターンについて考えてきたが、結局のところ迷路に迷い込み、思い付きを述べるに終始した感がある。しかし、さまざまな問題点を指摘しただけでも、本稿は無意味なものではなかったと考える。今後の展開を期することとしたい。

最後に、本稿の要点をまとめれば、次のようになる。

①現代方言における東西対立分布の成立パターンには、東西対立をなす語形の、放射の中心地、放射の順序、伝播の範囲の三つの観点から見て、次の四つのタイプが想定される。

(a)京畿から放射された語形が全国に広まり、その後、関東から放射された新しい語形が東日本に広まることで、古い語形を残す西日本との対立を形成した場合。

(b)京畿及び関東から同じ時期に放射された語形が、それぞれ西日本と東日本で地歩を固め対立を形成した場合。

(c)京畿から放射された語形が全国に広まり、その後、ふたたび京畿から放射された新しい語形が西日本に広まることで、古い語形を残す東日本との対立を形成した場合。

(d)京畿から放射された語形が全国に広まり、その後、ふたたび京畿から放射された新しい語形がむしろ東日本に広まることで、古い語形を残す西日本との対立を形成した場合。

このうち、(d)のパターンは、文献との対応から導き出せるにしても、直感

的には疑問であり、さらに吟味が必要となる。

- ②全国方言分布の成立過程に共通して見出されるという安部清哉氏の「四つの層」は、最後の近代全国層を除き、特定の時代と対応する明瞭な区切りとして把握されるべきものではない。東西対立の成立過程について言えば、それは、東日本方言層の発達、京畿からの放射を次第に強く阻むようになり、しまいには両者の勢力が均衡するに至る連続的な過程としてとらえられるべきである。

[付記] 本稿を成すにあたり、徳川宗賢氏より多くの御教示を得たことを記しておく。しかし、文献時代以前の伝播の中心や基層言語との関連など、重要な問題を取り上げることができず、それらは今後の課題として残った。なお、本稿には、文部省科学研究費総合研究（A）「日本人とその文化の地域性」（代表大林太良，1989・1990）の成果を含む。方言形成史研究全体から見た東西対立分布の位置付けや課題については、小林隆「方言形成史研究の展望と課題」（上記科研費シンポジウム原稿集，1990・12）で触れるところがあるので、御興味のおありの方は、国立国語研究所の小林まで資料を請求されたい。